

アントワーヌ・ヴァトー『シテール島への巡礼』1717年

曲目解説

Clair de lune

月の光

Gabriel Fauré（1845–1924）　ガブリエル・フォーレ

曲目解説

Clair de lune 月の光

Clair de lune (Menuet), Op. 46 No. 2 ／ 月の光（メヌエット） 作品46の2

Gabriel Fauré（1845–1924） ガブリエル・フォーレ

作曲	1887年（1888年に出版）
原曲の編成	歌とピアノ（歌曲）。1888年に、歌と管弦楽の版も作られた
詩	ポール・ヴェルレーヌ「月の光」（詩集『艶なる宴』1869年より）
調・拍子	変ロ短調・4分の3拍子・Andantino quasi Allegretto（歩くより少しゆっくり、ほとんど軽やかなアレグレットのように）
この楽譜	Pierre Gouin 校訂（Les Éditions Outremontaises、IMSLP、CC BY-SA 4.0）から入力。笛は歌の旋律を吹き、歌が休む前奏・間奏・後奏ではピアノの右手の旋律を吹く

作曲者

ガブリエル・フォーレは、南フランスのパミエに生まれました。9歳でパリの宗教音楽の学校に入り、そこでサン＝サーンスにピアノを習って、生涯の友となりました。長くマドレーヌ教会のオルガニストを務め、のちにパリ音楽院の院長となって、ラヴェルらを育てています。

生涯に100曲を超える歌曲を書きました。『月の光』は40代のはじめの作品で、フォーレの歌曲が新しい段階へ進んだことを示す一曲とされ、フランス歌曲を代表する作品としてよく歌われています。

曲の成り立ち

1887年、ヴェルレーヌの詩「月の光」に曲を付けたものです。友人で画家の、エマニュエル・ジャダンに献呈されました（ジャダンはピアノも上手でした）。翌1888年には、ポリニャック公妃のすすめで歌と管弦楽の版も作られ、国民音楽協会の演奏会で初演されています。

この管弦楽の版は、のちの1919年、フォーレの劇の音楽『マスクとベルガマスク』の中にも入れられました。

なお、ドビュッシーのピアノ曲『月の光』（ベルガマスク組曲）とは別の曲です。ドビュッシーも同じヴェルレーヌの詩に歌曲を書いています。

詩と曲調

ヴェルレーヌの詩集『艶なる宴』は、18世紀の画家ヴァトーが描いた、仮面をつけた人々が庭園で楽しむ「雅宴画」の世界に想を得ています。「月の光」では、恋人の心を、仮面の人々がリュートを弾き踊る庭にたとえます。人々は楽しげに歌いながら、どこか悲しげで、その歌は月の光に溶けていく。静かで美しい月の光は、木々の鳥を夢見させ、噴水をうっとりとすすり泣かせる——という内容です。

フォーレは、この古風な宴の情景を、ピアノの「メヌエット」（18世紀の上品な3拍子の舞曲）で描きました。ピアノは前奏から、歌とは別の、それだけで一つの曲になるような旋律を弾き続け、歌はその上で、語るように静かに入ってきます。二つの旋律が重なって進むのが、この曲のいちばんの特色です。

後半「静かな月の光」からは、ピアノが分散和音に変わり、明るい変ト長調の響きの中で、月の光がさざ波のように広がります。最後は前奏のメヌエットが戻り、静かに終わります。

曲の流れ （小節番号は、この楽譜の小節番号）

小節	内容
1〜11	ピアノだけの前奏。メヌエットの旋律が、p で上品に歌われる（笛はこの旋律を吹く）
12〜16	歌が入る。「あなたの心は、選ばれた景色」。ピアノはメヌエットを続ける
17〜23	「リュートを弾き、踊り、風変わりな仮装の下で、どこか悲しげに」。ピアノは和音を刻み、高まっていく
24〜25	ピアノの短い間奏（笛はピアノの旋律を吹く）
26〜36	メヌエットが戻る。「短調で、勝ち誇る恋と気ままな暮らしを歌いながら、 自分の幸せを信じていないよう。その歌は月の光に溶ける」
37〜38	ピアノが分散和音に変わり、景色が移る
39〜47	「静かな月の光、悲しく美しい。木々の鳥を夢見させ」。変ト長調の分散和音の上で、espressivo e dolce（表情豊かに、やさしく）
48〜55	「噴水をうっとりとすすり泣かせる、大理石の像の間の、すらりと高い噴水を」。少し高まって静まる
56〜61	後奏。メヌエットが戻り、静かに消えていく

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　変ロ短調

シ♭を主音とする短調で、調号は♭が5つ（シ・ミ・ラ・レ・ソ）。後半（38〜45小節）は、
♭が6つの変ト長調の明るい響きに移ります。標準の運指の楽譜は原調のままなので×が多くなります。
六本調子の楽譜はト短調に移してあります。

拍子　4分の3拍子

1小節に4分音符が3つ。ピアノの「メヌエット」は、18世紀の宮廷で踊られた上品な3拍子の舞曲です。
1拍目に軽く重さを置き、2・3拍目はさらりと流します。

二つの旋律

この曲では、ピアノが自分の旋律（メヌエット）を弾き、歌は別の旋律を重ねます。笛は歌の旋律を吹き、
歌が休む所ではピアノの旋律を受け持つので、どこからが歌の旋律かを意識して、
音色を少し変えてみるのもよいでしょう。

篠笛の楽譜と調について

同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	変ロ短調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。伴奏（A＝440Hz）と合わせるときは、一 がおよそドの笛（目安：八本調子前後）を使います。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。ト短調（原曲より長6度上）、チューナーの基準A＝436Hz（全体を25セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026